

6 1

【看護学科】

論文問題

2023(令和5)年度

【注意事項】

1. この問題冊子は「論文」である。
2. 試験時間は120分である。
3. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
4. 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
5. この問題冊子の印刷は1ページから4ページまでである。
6. 解答用紙は問題冊子中央に2枚はさみこんである。
7. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙が不足している場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
8. 試験開始後、2枚ある解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること（1枚につき受験番号は2箇所、氏名は1箇所）。
9. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
10. 問題番号に対応した解答用紙に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
11. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字記入すること。なお、解答は1マス目から書き始め、文と文の間に空欄を入れないこと。
12. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
13. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
14. 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
15. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。



〔 I 〕 訪問診療所に勤務する訪問看護師である森山氏(僕) (48歳・男性)はがんと宣告され、余命は短ければ半年と説明を受け、自らが患者として余命をどう生きるか考えなければならない立場となっていた。

以下の課題文は、著者(私)が、森山氏とその部下である尾下氏と、がんの告知を受けてからの心情を告知1か月後に対話した場面である。この文章を読んで、後の設問に答えなさい。

森山の仕事は、患者が死を受容できるように心を砕き、残された時間を後悔のないように生きるよう導くことだった。彼はすでに自分が終末期に近づきつつあることを、わかっているはずだ。しかし、彼の口からはこんな言葉が漏れた。

「僕は生きることを考えてます」

私はどこかで遺言めいたものを聞かされるのだろうと覚悟していた。しかし彼は、死について語るつもりなど毛頭なかった。死ぬ覚悟を決めたわけでも、人生の総括として何かを言い残すつもりも一切なかった。彼を知る者なら意外に思っただろう。死を受け入れ、準備期間を大切にもらうことを仕事のひとつとして担っていた彼が、長い間、仕事の相棒であった尾下の前で、死を受け入れることを、きっぱりと拒んで見せたのだ。

身構えていた私の身体から、力が抜けていくのがわかる。

車は展望台の駐車場に入った。そこで私たち三人は、車を降りて外に出た。耳をかすめて、ぼうぼうと海風が吹く音がする。

森山は私の前では、徹頭徹尾「看護師」だった。ラーメンを食べている時も、往診車に乗っている時も、看護師の森山であり、職業が服を着て歩いているような人だった。まだ明けきらぬ早朝にも、人が寝静まった深夜にも、率先して患者のために駆けつけるハードワーカーでもある。彼もまた、多くの情熱ある看護師たちと同じように、その仕事を自らのアイデンティティとしていた。森山なら宇宙飛行士のような冷静さで、自分の予後を予測し、その中で、治る可能性を模索するものだと思っていた。その役割を脱ぎ捨てて、無防備に、無垢に、生きることに執着する森山がそこにいた。

彼はいつもの雰囲気と違って自由だった。その姿が取材で出会った在宅の患者たちを思い出させた。

在宅医療の取材ではユニークな生き方をしている患者に出会うことも多い。病人らしく生きることを拒否した、ある種の自由奔放さを持っている人たちだ。

私が在宅医療の取材を始めたのは、だいぶ前のことだ。しかし、在宅医療の専門家から「家で過ごすというのは、素晴らしいことです」と何度聞かされても、難しさばかりに目が行ってしまい、どう書き進めていいのかわからなかった。

とりわけ狭い家の中での近すぎる人間関係が煩わしかった。本人の意思のほか、家族や、医師、看護師、ヘルパーなど、さまざまな職種の人々の感情が交錯するのを見てしまうと、核家族で育った私には、とても無理だろうと思えたのだ。家族の誰もが働かなければ生活が成り立っていかない昨今、家に病人を抱えることがどれだけ負担なのかを考えると、手放して在宅医療を素晴らしいとも言えない。取材はさせてもらったものの、結局、それは本にならずに宙ぶらりんのままで放ってあった。

しかし、私はこの時、森山の変貌ぶりを目の当たりにして、「患者」という立場に閉じ込められ

ない、ある種の自由さが懐かしくなった。彼らは、病に冒されながらも、ただ寝ていることを拒否し、生きたいように生きた。その自由は、周囲に迷惑をかけず、わがままを言わないことが美德とされた我々にとって、時に疎ましく、また、うらやましい種類のものだった。私には手に入りっこないとあきらめてきた自由だったのだ。

医師に同行し、自分も医師の視点で見えてしまうから、つい彼らを病人という枠で捉えてしまう。しかし、病気はあくまでその人たちの一部に過ぎない。

森山は、看護師という役割から降りて、素の自分を私に見せてくれた。それは、職業で病と向き合っている時とは、やはりだいぶ違っていた。

「身体が変わったら、自分自身も変わってしまったんですよ」

その感じは私にも理解できる。身体が変われば、考え方も変わる。私たちは病をきっかけに、生き方が変わってしまった者同士だった。

「予後を気にして生きていたら、それだけの人生になってしまう。僕は僕自身であって、『がん患者』という名前の人間ではない。病気は僕の一部分でしかないのに、がんの治療にばかり目を向けていたら、がんのことばかりを気にする人生を送ることになってしまう。闘うのではない。根治を願うのでもない。無視するのでもない。がんに感謝しながら、普段はがんを忘れ、日常生活という、僕の『人生』を生きていきたいんです」

彼は慣れた手つきで大勢の死を扱う、いつもの森山ではなかった。職業人としての建前を手放したようにみえた。しかし、彼は、話の終わりにこうも付け加えたのだ。

「でもね、僕は在宅看護をやっていて本当によかった。患者さんたちが、僕に教えてくれたことがたくさんあります。彼らは見せてくれたんですよ。途中つらいところを通ったとしても、最後はみな、穏やかに笑いながら逝くんです」

(出典 佐々涼子『エンド・オブ・ライフ』, 集英社インターナショナル, 2020)

- (1) 下線部にある「生きること」とは、どのようなことか。また、それはどのような経験に基づくものか。本文の言葉を用いて、150字以内で説明しなさい。
- (2) 本文をふまえ、治療で回復が見込めず、数か月以内に死を迎えると医学的に診断された在宅療養患者に対する関わりについて、看護職を目指すあなたの考えを400字以内で論じなさい。

〔Ⅱ〕 コンパッションとは、誰かが苦しむのを目の当たりにした時、苦しんでいるその人を助けたいと思う気持ちであり、その苦しみに遠ざかるのではなく立ち向かう実践である。苦しみに、自分自身の苦しみと他者の苦しみの両者が含まれる。

以下の資料は、デンマークにおける、精神疾患(うつ病など)を持つ家族をケアする家族介護者の精神的苦痛に関する研究のまとめの一部を示したものである。この研究では、家族介護者を対象に行われたコンパッションを養うプログラムについて、参加した人と参加していない人の精神的苦痛(うつ、ストレス、不安)の点数を比較した。プログラムは講義、演習、参加者でのグループディスカッションで構成され、週1回2時間のものが計8週間実施された。講義にはコンパッションとは何かに関する説明や科学的研究の紹介、演習には自身と家族の苦しみを客観的に見つめるトレーニング、苦しみに対する具体的な行動をイメージするトレーニングが含まれていた。図と表を踏まえて、以下の問いに答えなさい。

- (1) 研究の結果について、図表から読み取れることを述べたうえで、その結果が生じた理由を考察し、350字以内で述べなさい。
- (2) コンパッションを必要とする人の具体例を一つ挙げ、その理由と、望ましい支援の在り方について、本研究結果を踏まえてあなたの考えを400字以内で述べなさい。

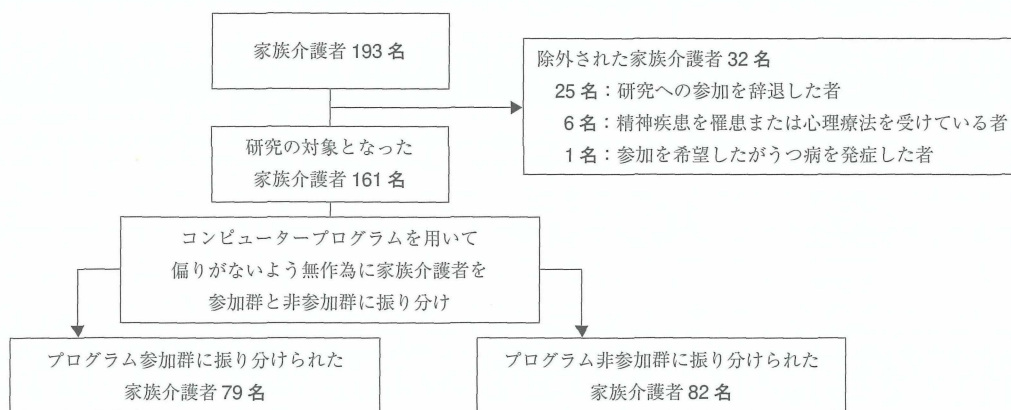


図 対象者の研究への参加状況

表 家族介護者の精神的苦痛の点数

	精神的苦痛の点数 ^{a)}				両群における 点数の差
	参加群		非参加群		
	平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
うつ					
プログラム実施前	10.9	8.7	10.8	8.4	
終了直後	7.8	8.3	11.3	9.5	*
終了3か月後	7.0	8.1	11.1	10.9	*
終了6か月後	6.6	8.3	11.4	10.7	*
不安					
プログラム実施前	6.9	6.5	6.7	5.3	
終了直後	5.1	5.3	6.7	7.0	*
終了3か月後	5.0	5.5	7.1	7.0	*
終了6か月後	5.6	5.9	7.4	7.9	*
ストレス					
プログラム実施前	15.0	7.9	15.8	7.4	
終了直後	10.7	7.1	15.8	8.8	*
終了3か月後	10.8	8.4	15.7	10.4	*
終了6か月後	10.4	7.7	15.4	10.0	*

a)精神的苦痛の点数は、いずれも最小0点、最大42点であり、点数が高いほど苦痛の程度が大きいことを意味する。

*両群で統計学的に信頼できる差があったことを意味する。

(出典 Effect of a compassion cultivate training program for caregivers of people with mental illness in Denmark: a randomized clinical trial. JAMA Netw Open. 2021;4(3):e211020. 一部改変)